

機関番号：32707

研究種目：研究活動スタート支援

研究期間：2009年度～2010年度

課題番号：21830133

研究課題名（和文） 幼児教育の特性を活かした特別支援教育の探究

研究課題名（英文） Specific Characteristics of Early Childhood Education for Children with Special Educational Needs in Japan

研究代表者

宇田川 久美子 (UDAGAWA KUMIKO)

相模女子大学・学芸学部・講師

研究者番号：90513177

研究成果の概要（和文）：保育現場での特別支援教育において、健常児の発達段階と比較して障害児の発達を促進していくことに主眼をおくのではなく、障害児を一個の主体として理解し、共感的にかかわることを通して発達を支援した。その結果、障害児と保育者の間に信頼関係が結ばれた。さらに、それをベースとして周囲の他者との共生関係も構築され、その共生関係の中で健常児と障害児の育ち合いが実現した。これより、一人一人の子どもを一個の主体として受け止めるという幼児教育の特性が障害児の発達支援において意義があることが示された。

研究成果の概要（英文）：Supporting children with Special Educational Needs (SEN) in early childhood education has a usual practice to compare their developmental stages with the normal development and to support development of insufficient ability. In this study our aim is to approach the SEN from the side of children with disability and base our understanding on their individuality. This new approach result a trustworthy relationship between the children with SEN and their teachers. Moreover, we established a symbiotic relationship based on mutual trust. We found that our symbiotic relationship-based approach became an essential starting point for the development for each child in early childhood education.

交付決定額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2009年度	890,000	267,000	1,157,000
2010年度	440,000	132,000	572,000
年度			
年度			
年度			
総計	1,330,000	399,000	1,729,000

研究分野：幼児教育学

科研費の分科・細目：教育学

キーワード：特別支援教育・幼児教育の特性・発達支援・関係を軸とした育ち・一個の主体としての育ち

1. 研究開始当初の背景

(1) 発達観の転換の必要性

人間の発達を個体内の能力の発達として

捉える「個体能力発達論」により、これまでの障害児支援においても障害を個人内のある能力が欠損した状態とし、欠損した能

力を改善するため、障害児の主体性を無視した「〇〇をさせる」ことで発達を促進していくことに主眼がおかれてきた。そのため、主体的な経験を通して発達していくという幼児期の特性が考慮されない現状があり、障害児の主体性を尊重した支援の可能性を究明することは急務であると考えられた。そこで、人間の発達を個体内のみに見出すのではなく、周囲の状況と他者との関係の中で捉えていく「関係発達論」に着眼し、関係構築を通じた新たな発達支援の可能性を追究することとした。

- (2)教育現場が抱える現代的な問題への即応  
従来の実験発達心理学においては、観察を実験的場面に限定し、そこで得られた数量的データから問題へアプローチしていくという研究方法に依拠してきた。そのため、教育現場が抱える問題の個々のケースへの対応には困難を抱えていたといえる。そこで、実際の教育現場が抱えている現代的な問題により即応した形でアプローチし、教育実践における適切な指導及び必要な支援についての具体的な提言を可能とするため、幼児教育の実践現場でのフィールドワークで得たデータから仮説を生成し理論を構築する質的研究方法により問題へのアプローチを試みることにした。

## 2. 研究の目的

平成19年の特別支援教育の制度化に伴い、幼稚園教育の現場でも障害児を積極的に受け入れ、一人一人の教育的ニーズに応じた適切な教育の推進が図られている。しかし、実際の現場での障害児に対する発達支援は、健常児を基準として障害を低減、克服して発達を促進させることが主要な目的とされがちであり、教師と障害児との間に「発達を促進させる一させられる」という関係が築かれているという現状がある。そのため、障害児は教師との信頼関係をベースとして自己を十分に発揮し主体的に活動することが困難な状況におかれているといえる。一方、幼稚園教育の基本として、幼児が安定した情緒の下で自己を十分に発揮して発達に必要な経験を得るために幼児の主体的な活動が保障されている。したがって、現状の幼稚園における障害児の発達支援においては幼稚園教育の基本が十分に踏まえているとはいえ、現場教師に混乱を来している。そこで、本研究では、幼稚園教育の基本を踏まえた特別支援教育の可能性について究明していくことを目的とする。

## 3. 研究の方法

- (1)幼稚園における特別支援教育のフィールドワーク
- ①東京都内私立幼稚園にて幼稚園教諭として幼児教育に携わった実践事例(対象児:2名、期間:4年間)
  - ②東京都内公立幼稚園にて保育アドバイザーとして参与観察を実施した実践事例(対象児:2名、期間:6カ月)
  - ③東京都内公立幼稚園にて保育アドバイザーとして参与観察を実施した実践事例(対象児:1名、期間:2年)
  - ④札幌市内私立幼稚園の異年齢保育にて観察を実施した実践事例(対象児:3名、期間:1年間)

\*③、④は研究期間に実施

- (2)フィールドワークにより収集したデータの「整理、確認」⇒「分析、解釈」⇒「仮説生成」、「分析結果の解釈」⇒研究成果の発表、論文作成

## 4. 研究成果

- (1)関係を軸とした障害児の発達
- ①信頼関係をベースとした発達障害児の認知面の発達:保育者が発達障害児の思いを汲み取り他児に代弁したり、保育場面の切り替えに細やかに配慮し発達障害児にわかりやすく環境を構成したりすることで、発達障害児は保育者や他児との間に信頼関係を築き、生き生きと幼稚園生活に参加することが可能となった。その結果、信頼関係をベースにして発達障害児がコミュニケーションを求めるようになり、実際のコミュニケーションを通して言語理解、状況理解等、認知面での発達が見られた。これより、保育現場での特別支援教育において、保育者や他児との信頼関係をベースとした主体的な活動が発達障害児の認知面の発達の前提となることが明らかとなった。
  - ②共感的なかわりによる自閉症児の言葉、及び、自他関係の認識の発達:保育者が自閉症児の見る世界、感じる世界を共にして、言葉を添えたり摸倣したりすることで、自閉症児自ら、保育者の摸倣をしたり、一連のやりとりを求めるようになった。このような両者の関係を軸としながら自閉症児の言葉がオウム返しからやりとりを含んだ二語文となり、また、「自分というもの」「他者というもの」への関

心が生まれ、自他関係に対する意識が芽生え「宣言的指さし」ともとれる姿が見受けられた。これより、保育現場での特別支援教育において、自閉症児の抱く世界を理解し共有するという共感的なかわりの意義が示された。

- ③一個の主体として受け止めることで見られたダウン症児（頸椎亜脱臼、重度知的障害）の育ち：保育者がダウン症児の目に見える行為の結果を評価するのではなく、その視線から行為の意味を理解し、ダウン症児を一個の主体として受け止めた。その結果、ダウン症児は他者と表情を交わし合っただけでなく、他児と共に行動することの楽しさを共有したりする体験を得た。すると、ダウン症児自らその共有体験を求めようになり、そのプロセスで幼稚園生活に主体的に参加する姿（自分の思いによって動き、自分の思いを前面に押し出し、他児と共にすることを志向する）が見られ、主体としての育ち（主体的な活動、自己発揮）が実現した。これより、保育現場での特別支援教育において、ダウン症児を一個の主体として受け止めることの意義が明らかとなった。

(2)教育現場が抱える現代的な問題への対応

- ①保育現場での特別支援教育のモデルを提示：これまで保育現場で障害児を受け入れた際、障害児は「集団生活を乱す存在」、「障害を改善し発達を促進しなければならない存在」、「健常児と比較して特別扱いしなければならない存在」として捉えられることが多く、現場教師は障害児保育の難しさに悩みを抱えていた。しかし、一人一人の子どもを一個の主体として受け止めるという幼児教育の特性が障害児の発達支援において意義があることが明らかとなり、幼児教育の特性を活かした特別支援教育のモデルを提示することが可能となった。

- ②特別支援教育における異年齢保育の意義：保育の形態として異年齢保育を実施している幼稚園においては、同年齢保育と比較して、年齢区分による発達段階に合わせて保育を行っていくことが困難であり、一人一人の子どもの発達プロセスに合わせて保育を行っていくこととなる。その結果、子ども一人一人を重視した保育が展開され、障害の「ある・なし」の違いが浮き彫りにされることなく、障害児と健常児が対等な関係の中で生き生きと幼稚園生活を送り、育ち合うという現状が明らかとなった。これより、保育現

場での特別支援教育の保育形態として異年齢保育に意義があることが示された。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計0件)

〔学会発表〕(計3件)

- ①宇田川久美子、子どもが「育つ」ということ—実践の場の「実感としての育ち」からの再考—(自主シンポジウム)、日本発達心理学会第22回大会、2011年3月26日、東京学芸大学

- ②宇田川久美子、保育現場での関係を軸とした自閉症の子どもへの育ち—特別支援教育を幼児教育の特性から再考する—(ポスター発表)、日本発達心理学会第22回大会、2011年3月26日、東京学芸大学

- ③宇田川久美子、「共に」の世界を生み出す共感、第34回札幌市私保連保育研究大会記念講演(札幌市私立保育所連合会主催)、2010年10月22日、札幌市民文化センター

〔図書〕(計1件)

- ①宇田川久美子、ミネルヴァ書房、第4章「自閉症の子どもへの育ちを支える共感的なかわり」(鯨岡峻、『最新保育講座 15 障害児保育』、pp. 113-137、2009年)

〔産業財産権〕

○出願状況(計0件)

名称：  
発明者：  
権利者：  
種類：  
番号：  
出願年月日：  
国内外の別：

○取得状況(計◇件)

名称：  
発明者：  
権利者：  
種類：  
番号：  
取得年月日：  
国内外の別：

〔その他〕  
ホームページ等

6. 研究組織

(1) 研究代表者

宇田川 久美子 (UDAGAWA KUMIKO)

相模女子大学・学芸学部・講師

研究者番号：90513177

(2) 研究分担者

( )

研究者番号：

(3) 連携研究者

( )

研究者番号：